現地ルポ

よい声たかい 肥後の赤牛

高森家畜市場のセリ市から

肥後の褐毛和牛（赤牛）といえば、すでに全国一の名を冠した特産として、いまさら多言の要もないことですが、最近の日本の農業が緩慢なテムポではありながら次第に営農の機械化へと伸展しつゝある一方、褐牛に対する社会的経済的要求が非常な勢いで伸びてきているために、この褐牛が役用から肉用としての価値を大きくプラスしながら、その名をいつそう昂めてきているのが現況です。では肥後の赤牛がいつたいどのようにして販路を全国へと拡めてゆくのか、そのセリ市状況をみなさんにごらんにいれましよう。（写真はセリ市場）

吹雪をついて

阿蘇の峯々は、すつかり雪化粧。寒波の襲来で気温は氷点下十度を上下し、高森盆地をめがけて吹きおろす風が、いつのまにか吹雪となつて町の中を絶えまなく吹きぬけています。駅を出た仲買人たちは、オーヴアーや皮ジャンバーに寒冷地特有の防寒帽をかぶり、皮長靴、ゴム長靴あるいは地下足袋といつた出立で、路上に積んだ雪をぎつしぎつしと踏みながら先を思ぎます。やがて雪でまつ白くおゝわれた家畜市場の広い屋根が鉛色の空を背景に浮かぶように見え、手前に建つ南阿蘇畜産農業協同組合の建物を二つに仕切つた事務室の隣では、次から次へとやつてくる仲買人たちが大きな角火鉢を真中にして、庭に見えている子牛の評価をひとくさり、いつどこでの市では最高値がいくらだつたとか、もはやさかんなセリ市の前哨戦をくりひろげています

いつぽう、事務所では？と覗いてみますと五、六名の組合職員が、今日の市に出される子牛の血統証明書やその性別、生年月日、毛色及び特徴、蓄殖者などを記した犢登記証明書など、セリ市に必要な書類を揃えるのに大わらわというところです。

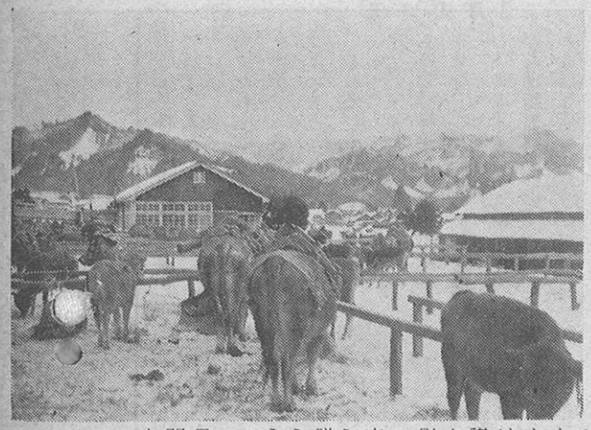
前日行われたといわれる山西家畜市場での結果をちよつと訊ねてみますと、糴売頭数が一六四頭で、その中の最高値が四七、五〇〇円、最低値が一〇、〇〇〇円だつたそうで、平均しますと二六、〇五八円になつたとのこと。

この親にしてこの子あり

さて、そろそろ正午の開場時刻も近まりますと、庭の片方に設けられた畜舎の中では、飼主のお百姓さんたちが今日限りの子牛の手入れに一生けんめいです。背中につんだ雪を払いのけたり、ブラシで胴やお腹のあたりをゴシゴシとこすりながら、毛なみを揃えたり色つやを出すやらなかなかの念の入りよう。また戦後初めてだというこの吹雪の悪条件にもかゝわらず、集つた牛はざつと百五十頭。

どの子牛も親牛といつしよで、その品定めには親牛までが一役買つて出なければならず、〃この親にしてこの子あり〃とはまんざら人間の世界ばかりではありません。

親牛が啼けば子牛が啼き、一頭が啼けば両側の二頭も……といつた具合に、たえまなく牛の叫び声が畜舎の中からあたり一面へとひゞきわたり、なんとものどかな風情さえみせてくれます。



市場にきた赤牛たちは飼主と別れることは知らない……★

見てる間に太くなる

すつかり市場での準備ができたようすなので、中へ入つてみますと、およそ二〇〇平方メートルの広さの真ん中に七、八メートル四方の空地が木柵で仕切られてあり、その四角い三方の外側に段々づくりの長い腰掛が、そして残りの一方には通路を隔てたステージが一段高く設けられてあつて、畜協関係の人々がつゞきの長机を前にずらつと並んで開会を宣しようとしています。このステージの片隅には、セリ市の会計を引きうける現金窓口がこじんまりと柵で仕切られてあり、四五人の男女事務員が札束を積んで準備OK。

さしずめ小規模の屋内斗牛場とでも云いたいようなこの高森家畜市場は、県下五十六ケ所の家畜取引法に基く施設の中で登録がもつとも古く、木造建の二ケ所に人間と牛とが交々出入する開けつ放しの入口、出口があつて、板の間のすきま風はさすがに身に泌みます。

場内の三方をぎつしりと埋めた仲買人や一般農家の人々、それに飼主たちがいまかいまかと満を持して開会を待つていますと「では開会に先立ち、本地区における赤牛の販路拡張に努力された功績を讃え、さらに破格の買入高に大きな実績を持たれる本村氏以下十二人の方々に表彰並びに感謝状の贈呈を行います」

とマイクを通したお知らせとともに一斉に拍手が起り、小屋迫南阿蘇畜協長から一人一人に記念品と賞状がていねいに贈られました。このあと小屋迫畜協長から新年の挨拶があつている間に、表彰をうけた香川県の造田梅吉さんに肥後赤牛の評価を訊ねてみますと

「……そりやあ何と申しましても育ちが早いということですネ。とにかく見てる間に太くなるつていうことですよ。次に良く働くことです。つまり耐久力があるつていうことになりますかね…。それから、おとなしい、実におとなしい（……と何度も念を押すように）婦人がわずかのあいだに扱うようになりますからね。」

「値段の方はいかがでしよう？」

「えゝやはり役用としても肉用としましても赤牛の質が良いために、それだけ他の牛と違つて高値にはなりますよ。さつき申しあげたとおり、多くの面で飼いやすいので、もう値だんの方はあまり問題ではないですネ……」

と造田さんは六十才とは思えぬ若さで張切つています。係の人の話では、造田さんは年間に百五十頭ほど売買するのだそうです。

カン高い牛飼いたちの声が場内を烈しく圧する……★

はげしいせりあい合戦

さあ、いよいよセリ市の開幕です。ステージのテーブルに釣り下つた鐘をガーン、ガーンと係員が叩きますと、これが開幕の合図。場内は忽ち騒然となつて百数十人の二つの眼が一せいに入口へ注がれます。すると、一人の牛索人が親牛と子牛とを一頭づゝ索きながら、通路に溢れ出た仲買人たちの間をえり分けえり分けての入場です。

さて親牛、子牛が揃つて柵の中へ入つたかとみるまに、いきなり天井の方から〃ハイ、赤だ、赤だ。さあ、さ……〃という声が地面を叩きつけるような勢いでとゞろきます。思わず、その方を見上げますと、町や村などでちよくちよく見かける火見櫓のような仕組みの場所から、一人の男が手にした赤い小旗を振つて現れた子牛のせり上げを待つところなのです。

先づは、セリ売りの勧進元というところ。一瞬のあいだに、仲買人の一人が〃二万〃と指を二本揃えて突き出すと、一方からは〃二ツ〃と声がかゝります。すると櫓の男は、四方に眼を怒らせながら〃ハイ、二万二千〃と小旗を上下に振つて次の競上げを待てば、間髪を入れずに〃五ツ〃〃ハイ、二万五千〃〃えいツ、三万ツ〃と、たちまち負けず劣らずのセリあい合戦が場内をいつそうの緊張へとたかめてゆきます。

この間、牛索きに索かれた子牛は始終親牛に寄りそうような格好で柵の中を五回、六回と廻り、〃さあご覧なれ〃と買値の競落しを待つのです。

〃三万三千〃〃ハイ、三万三千、さあさ……〃と櫓の男は眼を皿のようにしてなおも仲買人たちの眼の動きを見守ります。〃よおし、三万四千だツ〃〃ハイ三万四千……〃〃四千百ツ〃〃ハイ三万四千百……〃〃二百ツ〃〃ハイ、三万四千二百……〃と…、せり値は次第に刻みを縮めてゆきますと、はじめからセリあつていた三十二、三才の黒ジャンパーの仲買人は、よほどその子牛に魅せられたらしく、ふたたび〃三万五千ツ〃と大きくリードをつけました。〃ハイ、三万五千……〃と櫓の男は呼び次いで、ぐつと仲買人たちに眼を凝らします。満場は生唾を呑む思いの緊張感で一瞬水を打つたように静まりかえりました。

一秒、二秒、三秒……と微妙な空気に支配された場内からは、ついにそれ以上のセリ値が生れる気配もありません。ふたたび〃三万五千……〃と周囲を見渡しながら櫓の男は念を押すように云うと、すでに反応のないところを呼吸ではかつたものか〃ハイ、決つた〃と早口に云つて、ゆつくりと赤い小旗を上から下へと降り〃三万五千〃を最高値として裁定を下しました。思わず、緊張が解れて歎息ともつかぬざわめきが次第にひろがつても、それとは知らぬ子牛は小さな尻尾をさかんにふりながら、親牛とともに出口へと消えてゆきます。それといつしよに鐘がガン、ガンと気忙しく鳴りひびき、競落した仲買人がその二ツ鐘を聴いて急ぎ足で鐘を叩いた係のところまで馳け寄りました。そこには、飼主がさきほどから手放す子牛の値が幾らまでに競あうものかと、固唾を呑んで見守つていたのです。そして、二ツ鐘とは、飼主が競落された最高値に承諾を与えた証しであつたわけなのです。反対に一ツ鐘とは、売値と買値とが折合わないことだそうで、年間を平均しますと市場に出された三割ていどがこれに当るとのこと。

〃さあ、次は日の丸ツ〃とこんどは櫓の男が日の丸の小旗をとり出して競りあげを待つが早いか、〃三万ツ〃という値が飛び出しました。〃ハイ、三万……〃、すると忽ち挑ねかえす勢いで〃三万二千ツ〃と鳥打帽の一見温厚な年寄風から高値が競われてゆきます。〃ハイ、三万二千……〃とセリ市は、なお百数十頭をあとに控えながら、一頭について、早いところで三十秒、平均すると一分たらずのあいだに競合いが演じられて勝負が決つてしまいます。ところで、この間に多忙なのは何と云つてもステージに居並ぶ事務員たちです。次から次へと廻つてくる登録や血統などの証明書に照らし合せながら作つてゆく伝票やら計算書やらを、算盤片手に手際よく捌いてゆかねばなりません。

遠・東北、関東へ……

では、このような市場に出される赤牛の種別をみてみますと、すでにさきほどからの情景の中で出ておりますように、本登録を「日の丸」、予備登録を「赤旗」、補助登録を「青旗」、その他血統の不明確なのを「白旗」といつた具合に四、ツに識別されているわけです。このような赤牛に対する評価が「日の丸」が一番良くて「白旗」がそれに劣るのは勿論ですが、中には、仲買人の眼からは「日の丸」よりも「赤旗」の子牛に高値がつけられたり、「赤旗」よりも「青旗」の方に高値がつけられて競落される場合もあるのです。

役用、肉用の

（次頁へ）

吹りしきる雪の中を……★